人づくりの理念 今に

私塾「合志義塾」跡（合志市）

明治から昭和にかけて、合志市合生黒松で男女を問わず農家の子弟を教育した私塾「合志義塾」。農村に近代を伝えた〝学校〟として語り継がれている。近年、歴史漫画の出版や元塾生のノート発見などで注目を集めるが、地元ではゆかりの史跡が守られている。

合志義塾の記念館前で元塾生の岡村良昭さん（左）に話を聞く熊本高専の伊藤利明教授＝合志市合生

漫画、資料で注目　再顕彰の動きも

合志義塾は高等小学校の教員だった工藤左一と平田一十が1892年、故郷に開いた。いとこ同士で、当時は20代の若さ。教師や生徒に上下はないという「師弟同行」の理念で、1949年の閉塾までに6590人を育てた。

今も田畑が広がる黒松地区。塾舎は現存しないが、塾創立30周年に同窓生らが建設した「記念館」が残る。現在は平田家の子孫が牛舎として使っており、元塾生で「合志義塾史」を編さんした元熊日記者の岡村良昭さん(90)＝熊本市中央区＝は「記念館には図書室や板間があり、剣道の稽古に打ち込んだ」と懐かしむ。

記念館南側のカタルパの木は、若き日の一十が学んだ大江義塾（同市中央区）から分けてもらったものと伝えられる。その根元には、75年に同窓生が建てた記念碑。高台の墓地には義塾跡を見守るように、左一と一十が眠っている。

合志市は、一帯を「合志義塾跡」としてPRしている。駐車場や看板を整備し、同市福原の市総合センターヴィーブル内の市歴史資料館には「合志義塾」の扁額などを展示。合志マンガミュージアムはシンポジウム、住民グループが史跡見学会や元塾生への聞き取りをするなど、再顕彰の動きも広がっている。

同市野々島には第1次世界大戦下の17年に地元青年会が立てた「禁酒菓記念碑」があり、一十の名も刻まれている。

「左一や一十は社会に出た同窓生ら若者と交わり、指導的な役割を果たしていた」と義塾を研究する熊本高専の伊藤利明教授(59)＝近代教育史。「2人の教育の基本にあったのは人づくり。義塾で学んだ若者の多くが、農村振興の担い手となった」と話している。

（宮崎あずさ）

1975年に同窓生が建立した合志義塾跡の碑（中央）。右奥は平田一十が学んだ大江義塾から贈られたというカタルパの木

合志義塾の関連資料が展示されている合志市歴史資料館＝合志市福原